

第 1 章 調査研究の概要

1 調査研究の経緯

近年、生徒指導に関わる課題が多様化、複雑化し、暴力行為やいじめ等の問題に加え、インターネットに絡む問題行動も多数報告されている。このような状況の中で、児童生徒の社会性を養い、問題行動を未然に防止し、児童生徒の健全育成を図るためには、規範意識を醸成していくことが重要な課題となっている。

当センターでは、平成 17 年度及び平成 22 年度にも「栃木の子どもの規範意識調査」を実施し、指導の手立て等の提案をまとめている。今回の調査研究では、過去の調査との比較を含めた状況把握および分析を行うとともに、それに基づいた指導の在り方についての参考資料を作成するために、児童生徒用の調査用質問紙を作成し、抽出校を対象に質問紙調査を行うこととした。

2 調査研究の目的

本県児童生徒の規範意識の状況を把握し、規範意識醸成の手立てを探るための調査研究を行い、その結果を資料としてまとめ、関係学校等に配布するとともに研修等で活用することにより、教員の資質向上及び児童生徒の規範意識をはじめとする社会性の育成に資する。

3 調査研究の方法

本県児童生徒の規範意識の状況を把握し規範意識醸成のための手立てを探るため、調査用質問紙を作成し抽出調査を行った。

その後、質問紙調査結果の集計及び分析を行い、結果をまとめ、本調査報告書及びパンフレットを作成した。

(1) 質問項目の作成について

規範意識の状況を把握するための質問項目と、規範意識醸成の手立てを探るための質問項目に分けて作成した。

ア 規範意識の状況を把握するための質問項目

本県児童生徒の規範意識の状況を多面的に把握するため、「他の人がすることをどう思うか」と「自分自身はどうか」の 2 視点での回答を求める 28 問の質問項目を作成した。（2 視点×28 問＝合計 56 問）28 問の質問項目は、遵法精神、公共マナー、情報モラル、いじめを否定する意識等について問う質問項目とした。

〔本報告書 第 4 章 調査用質問紙 質問 1 及び質問 2〕

イ 規範意識醸成の手立てを探るための質問項目

規範意識は他者や集団との関わりの中で育まれるものであるとの仮説のもと、自己有用感、異学年交流、児童生徒の生活環境や生活時間について問う質問項目を作成した。

〔本報告書 第 4 章 調査用質問紙 質問 3：児童生徒の生活環境〕

〔本報告書 第 4 章 調査用質問紙 質問 4：異学年交流〕

〔本報告書 第 4 章 調査用質問紙 質問 5 及び 6：自己有用感〕

〔本報告書 第 4 章 調査用質問紙 質問 8：児童生徒の生活時間〕

(2) 質問紙調査について

ア 抽出の方法

質問の意味を理解し、正しく読み取ることができると考えられる小学校4年生から高等学校3年生までの9学年を調査対象学年とした。

(ア) 小・中学校

県内の小・中学校について学校規模別のグループを設定し、それぞれのグループから偏りがないように、小学校は14校、中学校は13校を抽出し、その学校の当該学年の1学級を対象とした。

(イ) 高等学校

県内の県立高等学校（全日制）について地域や学科の偏りがないように10校を抽出し、その学校の当該学年・学科の1学級を対象とした。

イ 調査の実施

(ア) 調査方法

調査用質問紙により回答を求めた。所要時間は30分～40分程度とした。

(イ) 実施期日

平成27年6月29日(月)から7月10日(金)までのうち、学校が定めた期日で実施した。

(ウ) 調査実施数及び回収率

調査実施数等の詳細については、次の表1に示したとおりである。

調査は、担任（担当教員）が自教室で質問紙を配布し、児童生徒に回答させ回収しているの
で、回収率は全て100%となった。なお、当日欠席した児童生徒は、今回の調査には参加して
いない。

表1：調査実施数及び回収率

学 年	対 象 学級数	実施児童生徒数 回収／配布（回収率）
小 学 校 第4学年	14	433 ／ 433 （100%）
小 学 校 第5学年	14	426 ／ 426 （100%）
小 学 校 第6学年	14	449 ／ 449 （100%）
中 学 校 第1学年	13	372 ／ 372 （100%）
中 学 校 第2学年	13	362 ／ 362 （100%）
中 学 校 第3学年	13	368 ／ 368 （100%）
高等学校 第1学年	10	396 ／ 396 （100%）
高等学校 第2学年	10	397 ／ 397 （100%）
高等学校 第3学年	10	385 ／ 385 （100%）
計	111	3588 ／ 3588 （100%）

(3) 集計による現状把握について

質問項目ごとに、学校種に分けて集計することで、県内の状況を把握した。

〔全集計結果については、本報告書 第3章 調査結果を参照〕

(4) 分析について

規範意識の状況を把握するための質問項目（4件法）への回答の合計を「規範意識の高さ」とし、
規範意識醸成の手立てを調べる質問項目との関係を分析した。

(5) パンフレットの作成について

「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた規範意識醸成の手立てを巡る質問項目をもとに、自己有用感、異学年交流、生活環境や生活時間の視点で、規範意識を醸成する効果的な手立てについて掲載した。また、規範意識の状況を把握するための質問項目のうち、過去2回の調査との比較ができる質問項目について、経年変化をグラフで示した。

[パンフレットについては、本報告書 第2章 調査研究報告（概要）「人との関わりを通して規範意識を育てよう」を参照]

4 分析結果及び分析結果の考察

規範意識醸成の効果的な手立てを巡るため、質問紙調査によって得られた集計結果を統計学的手法によって分析した。規範意識の状況を把握するための質問項目（4件法）の合計から把握した「規範意識の高さ」と、規範意識醸成の手立てを巡る質問項目（自己有用感、異学年交流、生活環境や生活時間）との関係を重回帰分析で探った。なお、この分析では、自分を社会的に望ましく見せたい欲求の影響を除去するために、「社会的望ましさ尺度」でデータ補正を行った。

[本報告書 第4章 調査用質問紙 質問7：社会的望ましさ尺度]

また、本県児童生徒の規範意識の状況を過去と比較して把握するため、過去2回の調査で把握した規範意識の状況との経年変化を調べた。

(1) 「規範意識の高さ」と自己有用感

「規範意識の高さ」と自己有用感の関係を重回帰分析で探った。これは、規範意識は他者や集団との関わりの中で育まれるものであるとの仮説のもと、規範意識を醸成するためには、どのように自己有用感を高めるのが有効であるかを捉えたいと考えたからである。

当センターとしての自己有用感の捉え及び自己有用感を構成する諸要素等については、次の図1を参照されたい。

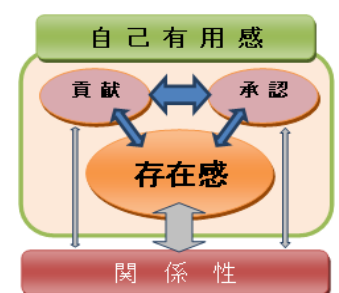
自己有用感についての質問項目は、当センターが平成24年度に作成した尺度を使用した。「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた自己有用感についての質問項目と、その質問項目が測る自己有用感の諸要素等は次の表2のとおりである。

自己有用感とは

「他者や集団との関係の中で、自分の存在を価値あるものとして受け止める感覚」

自己有用感を構成する要素等

- ・「存在感」：他者や集団の中で、自分は価値ある存在であるという実感
- ・「承認」：他者や集団から、自分の行動や存在が認められているという状況
- ・「貢献」：他者や集団に対して、自分が役に立つ行動をしているという状況
- ・「関係性」：安心感や被信頼感などから構成されており、自己有用感を獲得するための前提であったり、土台となったりするもの



「高めよう！自己有用感～栃木の子どもの現状と指導の在り方～」

（平成25年3月 栃木県総合教育センター）より

図1：自己有用感の捉えと自己有用感を構成する諸要素等

表 2 : 「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた自己有用感についての質問項目

	変数名	係数	標準誤差	標準化係数	t値	
小学校	わたしは、家の人を信頼している。(関係性)	1.530	0.577	0.105	2.654	**
	わたしは、先生の役に立っていると思う。(存在感)	1.176	0.520	0.110	2.262	*
中学校	わたしは、家の人と一緒にいると安心できる。(関係性)	2.652	0.955	0.156	2.776	**
	わたしは、クラスの人を信頼している。(関係性)	1.822	0.849	0.108	2.146	*
	わたしは、先生を信頼している。(関係性)	2.706	0.844	0.169	3.206	**
	わたしは、クラスの人の手伝いをすることがある。(貢献)	2.573	0.809	0.132	3.181	**
高校	わたしは、家の人から信頼されていると思う。(存在感)	1.701	0.912	0.089	1.864	+
	わたしは、先生と一緒にいると安心できる。(関係性)	2.521	0.957	0.133	2.635	**
	わたしは、家の人の手伝いをすることがある。(貢献)	1.129	0.651	0.058	1.733	+
全体	わたしは、家の人と一緒にいると安心できる。(関係性)	1.006	0.478	0.054	2.107	*
	わたしは、家の人から信頼されていると思う。(存在感)	0.779	0.420	0.046	1.852	+
	わたしは、クラスの人を信頼している。(関係性)	1.208	0.438	0.068	2.760	**
	わたしは、先生の役に立っていると思う。(存在感)	0.795	0.479	0.045	1.662	+
	わたしは、先生を信頼している。(関係性)	1.393	0.433	0.083	3.218	**
	わたしは、先生と一緒にいると安心できる。(関係性)	1.085	0.428	0.068	2.536	*
	わたしは、家の人の手伝いをすることがある。(貢献)	0.705	0.328	0.039	2.153	*
	わたしは、クラスの人の手伝いをすることがある。(貢献)	1.281	0.432	0.065	2.964	**

従属変数:「規範意識の高さ」

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

「存在感」「貢献」「関係性」についての質問項目と「規範意識の高さ」に有意な相関が見られた。このことから、児童生徒と教師及び児童生徒間の良好な「関係性」を構築し、児童生徒が他者や集団に対して「貢献」する場を意図的に設定し「存在感」を実感させることが、規範意識の醸成に正の影響を及ぼすことが分かる。

(2) 「規範意識の高さ」と異学年交流

「規範意識の高さ」と異学年交流の関係を重回帰分析で探った。近隣の子ども同士の交流や、家庭の中の兄弟姉妹同士の交流などの自己有用感獲得の場は、近年の少子化や地域の人間関係の希薄化によって失われてきている。そのような状況の中で、自己有用感を高める手立ての一つとして、「同じ地域の異年齢の子どもが集まってくる場所」という学校の特徴を積極的に活用しようという考え方が提唱されている（『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」－活動実施の考え方から教師用活動案まで－』平成23年6月 国立教育政策研究所生徒指導研究センター）。そこで、どのような異学年交流が、児童生徒の自己有用感を高め、さらには規範意識の醸成につながるのかを捉えようと考えた。

異学年交流についての質問項目は、国立教育政策研究所が平成14年に作成した社会性測定尺度の中の「自分より下の学年の人のこと」についての質問項目を使用した。「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた異学年交流についての質問項目は、次の表3のとおりである。なお、「他の学年の人」は「自分より下の学年の人」として回答を得た。

表3：「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた異学年交流についての質問項目

	変数名	係数	標準誤差	標準化係数	t値
小学校	わたしは、他の学年の人と仲良くしている。	0.981	0.427	0.069	2.296 *
	他の学年の人から注意されたとき、相手の話を素直に聞くことができる。	2.185	0.464	0.168	4.710 **
	他の学年の人と約束したとき、相手との約束を守ることができる。	1.231	0.566	0.074	2.174 *
	他の学年の人のものを使うとき、相手に聞いてから使う。	1.506	0.588	0.081	2.560 *
	他の学年の人が仲間に入りたそうにしているとき、誘ってあげることができる。	1.124	0.458	0.086	2.451 *
中学校	他の学年の人と一緒にいるとき、相手の気持ちを考えて行動している。	1.508	0.851	0.072	1.773 +
	他の学年の人から注意されたとき、相手の話を素直に聞くことができる。	4.321	0.672	0.231	6.429 **
	他の学年の人のものを使うとき、相手に聞いてから使う。	3.679	1.122	0.125	3.278 **
高校	わたしは、他の学年の人の役に立っていると思う。	2.101	0.740	0.110	2.839 **
	他の学年の人から注意されたとき、相手の話を素直に聞くことができる。	3.061	0.857	0.142	3.570 **
全体	わたしは、他の学年の人の役に立っていると思う。	0.567	0.323	0.034	1.757 +
	他の学年の人から注意されたとき、相手の話を素直に聞くことができる。	3.157	0.391	0.161	8.066 **
	他の学年の人と約束したとき、相手との約束を守ることができる。	1.000	0.532	0.039	1.877 +
	他の学年の人のものを使うとき、相手に聞いてから使う。	2.031	0.542	0.075	3.749 **

従属変数:「規範意識の高さ」

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

質問項目のうち、「他の学年の人から注意されたとき、相手の話を素直に聞くことができる。」は、小・中・高の全てで、「規範意識の高さ」との有意な相関が見られた。

「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた質問項目の共通点として、「下の学年の人を尊重した関わり」という点が確認できた。このことから、下の学年の人を思いやったり、大切にしたりする望ましい行為そのものにより、社会性を身に付けたという実感が高められ、規範意識が育まれると考えられる。

(3) 「規範意識の高さ」と生活環境や生活時間

「規範意識の高さ」と児童生徒の生活環境や生活時間の関係を重回帰分析で探った。これは、児童生徒の日常生活の様々な場面に他者や集団との関わりがあり、その中に、規範意識を醸成するためのヒントがあると考えたからである。

生活環境についての質問項目は、児童生徒の家庭、学校、地域での生活環境に関する12問とした。また、生活時間についての質問項目は、学習時間、読書時間、パソコン・スマートフォンなどの情報機器で他者と交流している時間の3問とした。「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた生活環境や生活時間についての質問項目は、次の表4のとおりである。

表4：「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた生活環境や生活時間についての質問項目

	変数名	係数	標準誤差	標準化係数	t値	
小学校	わたしは、家の人に「おはよう」「おはようございます」などのあいさつをする。	2.105	0.392	0.147	5.376	**
	わたしは、時間を守ることができる。	0.977	0.360	0.082	2.711	**
	わたしのクラスでは、教室の床にゴミが落ちていない。	0.823	0.303	0.069	2.718	**
	先生は、大切なことを守らないときは厳しくしかってくれる。	1.951	0.633	0.092	3.083	**
	わたしの学校は、先生同士が協力している。	0.983	0.509	0.061	1.930	+
	パソコン、スマートフォン、ゲーム機などで、他の人と交流している時間	-1.485	0.308	-0.128	-4.816	**
中学校	わたしは、時間を守ることができる。	2.653	0.566	0.146	4.687	**
	わたしのクラスでは、教室の床にゴミが落ちていない。	1.260	0.414	0.078	3.043	**
	わたしの学校は、先生同士が協力している。	3.526	0.652	0.189	5.411	**
	家の人は、意見が合わないときでもわたしの話を聞いてくれる。	1.480	0.472	0.094	3.138	**
	パソコン、スマートフォン、ゲーム機などで、他の人と交流している時間	-3.066	0.385	-0.208	-7.964	**
高校	わたしは、家庭学習を言われなくても自分からする。	1.987	0.542	0.125	3.663	**
	わたしは、時間を守ることができる。	1.635	0.630	0.077	2.597	**
	先生は、みんながより良く生活ができるように考える時間をとる。	1.267	0.681	0.066	1.861	+
	先生は、大切なことを守らないときは厳しくしかってくれる。	1.267	0.702	0.057	1.805	+
	家の人は、意見が合わないときでもわたしの話を聞いてくれる。	1.849	0.558	0.099	3.312	**
	パソコン、スマートフォン、ゲーム機などで、他の人と交流している時間	-1.973	0.433	-0.131	-4.559	**
全体	わたしは、家庭学習を言われなくても自分からする。	0.805	0.254	0.053	3.172	**
	わたしは、時間を守ることができる。	1.481	0.303	0.078	4.889	**
	わたしのクラスでは、教室の床にゴミが落ちていない。	0.870	0.236	0.052	3.692	**
	先生は、みんながより良く生活ができるように考える時間をとる。	0.706	0.362	0.041	1.952	+
	先生は、大切なことを守らないときは厳しくしかってくれる。	1.400	0.407	0.061	3.439	**
	わたしの学校は、先生同士が協力している。	1.907	0.376	0.097	5.075	**
	家の人は、意見が合わないときでもわたしの話を聞いてくれる。	1.175	0.271	0.070	4.329	**
	パソコン、スマートフォン、ゲーム機などで、他の人と交流している時間	-2.188	0.220	-0.147	-9.954	**

従属変数:「規範意識の高さ」

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

「規範意識の高さ」と有意な相関が見られた生活環境に関する質問項目を、「他者や集団との関わり」の視点で見ると、教職員や保護者など、子どもに接する大人による「問題行動への毅然とした対応」「協働」「傾聴」などの姿が浮かび上がる。例えば、問題行動に対して教師が毅然とした対応をすることで、子どもは善悪の基準や、きまりやモラルの大切さを学ぶと考えられる。また、教師が協働することは、人との望ましい関わり方を示すことになり、子どもの他者や集団と関わろうとする意欲を高めることにつながると考えられる。さらに、大人が子どもの話を傾聴することにより、子どもは大切にされているという実感を高め、他者を尊重しようとする姿勢を学ぶと考えられる。これらのことから、子どもに接する大人が望ましい姿を示すことが、規範意識を育むことにつながると考えられる。

生活時間に関する質問項目では、パソコンやスマートフォンなどの情報機器で他人と交流している時間と「規範意識の高さ」に、小・中・高の全てで強い負の相関が見られた。情報機器に頼らない直接的な人間関係を充実させることが、規範意識の醸成にとって大切であると考えられる。

(4) 規範意識の経年変化

栃木の子どもの規範意識調査は、5年に1度行っており今回が3回目となる。規範意識の状況の経年変化を、過去2回の調査（平成17年度、平成22年度）で把握した規範意識の状況と、今回の調査で把握した規範意識の状況を踏まえて、次の表5及び図2で示す。なお、今回の調査における規範意識の状況を把握するための質問項目のうち、過去2回の調査との比較が可能なものは、遵法精神や公共マナーについて、「他の人がすることをどう思うか」の視点で回答を求めた15問である。〔本報告書 第4章 調査用質問紙 質問1の【あ】〕

表5：各質問への回答の平均（4件法）

	小学校			中学校			高校		
	H17	H22	H27	H17	H22	H27	H17	H22	H27
タバコを吸う。	3.91	3.90	3.89	3.82	3.89	3.92	3.38	3.68	3.74
お酒を飲む。	3.74	3.79	3.63	3.56	3.70	3.70	2.84	3.14	3.28
ものを壊したり、落書きしたりする。	3.86	3.90	3.92	3.60	3.80	3.88	3.55	3.69	3.81
人に暴力をふるう。	3.92	3.92	3.94	3.84	3.86	3.90	3.80	3.83	3.87
人のものを無断で使う。	3.85	3.85	3.92	3.60	3.69	3.83	3.44	3.54	3.73
万引きをする。	3.96	3.98	3.99	3.94	3.98	3.99	3.87	3.96	3.98
自転車で二人乗りをしたり横に並んで走ったりする。	3.58	3.62	3.80	2.92	3.34	3.68	2.46	2.82	3.42
自転車のかさ差し運転をする。	3.50	3.56	3.82	2.64	3.35	3.75	2.33	2.79	3.53
茶髪にしたり化粧したりする。	3.40	3.55	3.40	2.96	3.32	3.46	2.16	2.46	2.77
深夜出歩く。	3.58	3.71	3.74	3.09	3.40	3.56	2.45	2.68	3.03
バスや電車の中、お店などで、まわりに人がいるときに、大声で話したり騒いだりする。	3.83	3.88	3.92	3.54	3.73	3.84	3.42	3.49	3.73
バスや電車の中、お店などで、まわりに人がいるときに、スマートフォンなどで話す。	3.57	3.52	3.64	3.17	3.43	3.57	3.12	3.19	3.43
バスや電車の中で、座席を必要以上にとる。	3.82	3.85	3.90	3.53	3.74	3.85	3.39	3.50	3.74
電車の中や店先などで、しゃがみこんだりじかに座ったりする。	3.67	3.63	3.77	3.31	3.55	3.72	3.09	3.32	3.60
ごみをポイ捨てしたり置きっぱなしにしたりする。	3.88	3.90	3.96	3.58	3.81	3.91	3.52	3.66	3.86
平均	3.74	3.77	3.82	3.41	3.64	3.77	3.12	3.32	3.57

※数値は、「1：悪くない」「2：どちらかと言えば悪くない」「3：どちらかと言えば悪い」「4：悪い」の平均値である。数値が高いほど規範意識は高い。

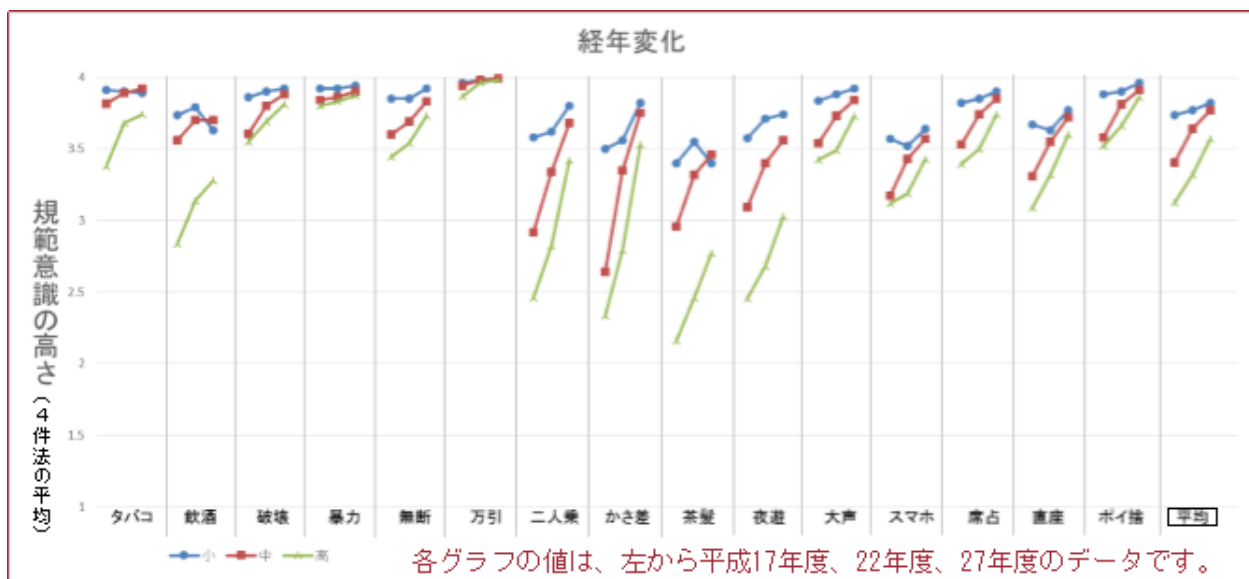


図2：各質問への回答の平均の変化

「たばこ」、「飲酒」、「茶髪」についての質問項目について、小学校の数値が若干下がった。そのほかは、全ての質問項目について数値が上がっている。特に、高校の数値の伸びが顕著で、そのため、小・中・高の学校間の差が縮小している。